



コロナと共にある新しい年のはじまりに

園長 野中 泉

新年あけましておめでとうございます。こう、ご挨拶しながらですが、年末のネットのニュースで、今年は年賀状に「おめでとう」や「慶び」の文字を使わない人も企業も多いという記事を読みました。手放して「おめでとう」と言えないその気持ちは、わからなくもありません。昨年一年間、そして新しい年を迎えた今も、私たちが大きな心配や不安と共にいることは、確かなことです。

私自身も個人としては、「コロナ禍が明けるまでは」「コロナが収束するまでは」といくつもの我慢を数える日々を過ごしてきましたし、離れて暮らす家族の健康を心配し続けてきました。でも、その一方で、一日も閉めることのない保育園の現場では、コロナだろうとなんだらうと「待ってくれない問題」の連続に向き合わざるを得ない毎日。その矛盾するアンバランスな感覚に、何度も迷い、立ち止まる、そんな一年だったように思います。

そんな迷いの渦中に、福岡にある老人施設「宅老所よりあい・よりあいの森」の代表で、近い友人でもある村瀬孝生さんがお便りをくれました。感染リスクと隣りあわせの厳しい現場でも「変わらぬ穏やかな日常」を守り奮闘する職員さんたちの仕事ぶりを伝えてくれるお便りだったのですが、その最後は、こんな言葉でした。

「お年寄りの介護をしながら考えてきたことは、『明日の幸せのために、今をその準備中にしない』ことです。日々老いを重ねるお年寄りたちは明日よりも今日が若い。明日よりも今日が最高なのです。コロナだろうが、大地震だろうが、やはり『今』が大切。むしろ、明日が不透明なときほど『今』が大切。自分に言い聞かしています。

でも感染はやはり怖い。この狭間で、揺れたり、揺れなかったりしながら仕事しています」

『明日の幸せのために、今をその準備中にしない』という言葉と「揺れたり、揺れなかったり」の心境に、大きく共感しながら、私もアトムsの毎日への思いを新たにしています。

コロナの時代、私たちは感染の不安だけでなく、外側から決めつけられる「常識」と「非常識」への息苦しきとも、いつも隣りあわせでした。それは、もちろん未知のウィルスへの戦い方が未だ確立していないからでもあります。その不透明さに便乗して、どんなことも世間の「コロナ側」からだけみた「常識」「非常識」に判断を委ねてしまう危うさも、やはり無視できないと思っています。

昨年、アトムの周りで、いくつかの子育て支援の場や、有志の集まりが、ひっそりと、地域での活動を閉じました。自治会やボランティアの活動でも、これを機に無くなったことがたくさんあります。「コロナで集まれないし、仕方ない」そう誰しもが当たり前のように口にする今だからからこそ、あえて、もう一度問わずにはいられません。この数十年、多くの自然災害の被災体験からも、虐待や孤独死などの悲惨なニュースからも、私たちが痛みと共にたどり着いたのは「人と人の関わりの希薄さが進めば、それは命の危機に直結する」という学びではなかったかと。

コロナは怖い。でも、だからこそ、コロナの側からではなく、もう一度『命』の側からきちんと向き合うことから新しい年をはじめたいと思っています。日々老いていくお年寄りたちにとって「今日が最高」であるように、日々育ち変化していく子どもたちにとっても「今日が最高」、どんな今も後回しにはできない「大事な命が育つ時間」です。子どもたちの大事な時間を、この時代に、どんなふうを守っていくのか。今年も、アトムの仲間たちとひとつずつ、ちゃんと迷ったり、考えたりしながら進んでいこうと思います。

参考：宅老所よりあいのホームページ：<http://yoriainomori.com> 関連書籍：「へろへろ：雑誌『ヨレヨレ』と「宅老所よりあいの人々」（ちくま書房） 「認知症をつづっているのは誰なのか「よりあい」に学ぶ認知症を病気にしない暮らし」（SB新書）他